
あの太陽のように……

雪丞丸

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あの太陽のように……

【Nコード】

N4950L

【作者名】

雪丞丸

【あらすじ】

銀魂高校にも新入生が入って来た。個性派揃いの2年Z組も無事に進級を果たしたが、今年も何かと問題を起こす…。

原作は3年Z組銀八先生です。

銀時は学生設定で、「坂田銀時」です。

キャラ崩壊注意。

逆八！

うめこ様に許可を頂いたので、所々シナリオ分岐があります。
ちなみに、最後のオチは銀時・高杉・土方・沖田です。

主人公紹介

ーメモー

名前：片瀬 怜

読み：かたせ れい

年齢：17歳

学年：2年Z組

性格：泣き虫。流されやすい。短気。

容姿：身長低い。幼児体型。

備考：銀魂高校に通う普通の女子高生。
クラスメートの銀時と晋助とは施設で育った幼馴染み。
部屋は違うが、同じマンションの同じ階で隣同士で三人と住んでいる。

ファミレスで、ウェイトレスとして働いている。
親に対しては、冷めた感情を持っている。
男女問わず、クラスメイトとは仲が良い。
色んな人の板ばさみに合っている。

各キャラ紹介（簡潔に

今更、各キャラの立ち位置が判らなくなってきたので、各キャラの設定。

ー銀魂高校 攻略対象キャラー

・土方 十四郎… 2年Z組の担任。数学教師。マヨラー。

・坂田 銀時… 2年Z組の生徒。主人公と高杉の幼馴染み。甘党。ヤキモチ妬き。

・高杉 晋助… 2年Z組の生徒。主人公と銀時の幼馴染み。クールで不良。だが、普通にボケる。

・沖田 総悟… 2年Z組の生徒。DS王子。爽やかな外見に反し、腹黒。

ー銀魂高校 攻略対象外キャラー

・神楽… 2年Z組の生徒。帰国子女。キャサリンと沖田とはライバル関係。大食い。

・志村 新八… 2年Z組の生徒。優等生でツツコミ役。メガネ。

・志村 妙… 2年Z組の生徒。新八の姉（留年した？とか言わないの。銀魂だから）。ゴリラのストーカー被害に遭う（全て振り返ち）。2年Z組の影の支配者。

隨時更新

第一話

ここは都立銀魂高校

新しく新入生が入って来て、私達は2年に進級した。

と、いうか……進級出来た。

理由？

このZ組はみんな問題児ばかりだから。

早く卒業させたいんだろうね。

そんな事は、どうでも良いんだけど……。

この銀髪天パ男をどうにかして下さい。

授業中なのに、私の肩に頭置いて寝てるんですけど。

事の発端は

『教科書忘れた。見せて』

と、棒読みで隣に居る銀時が机をくつつけて来た所から始まる。

この人は、授業なんて受ける気全くないんだよ。
机くつつけて、すぐ寝たから。

このモフモフ頭が邪魔臭い。

でも……柔らかくて好きなんだよね。
時折、漂ってくる甘い匂いも。

『もう時間じゃきー。終わるぜよ』

坂本先生の言葉で、新八くんが号令をかけた。
私も慌てて、席を立つ。

そのせいで銀時は、私の肩に顔を打つハメになる。

『礼！』

みんな一斉に礼をすると、タイミング良くチャイムが鳴った。
坂本先生は『飯じゃきー』と言いながら、教室から出て行く。

『あー？もう飯か』

頭を掻きながら、銀時が起きた。

あれ？顔打たなかった？

起きなかったのかよオオオオオ！！

『怜！銀ちゃん！一緒にお昼食べるアル！』

神楽ちゃんが、新八くんとお妙ちゃんを引き連れて来た。

「うん！じゃあ今、購買行つて来るから待つてて」

財布を持って出ようとした時、肩に重みがかかった。

ゆっくりと後ろを振り返ると、銀時が私の肩に腕を回して寄り掛かっていた。

『俺も購買に連れてってー』

いやいやいや。

自分で歩けよ。

・

「一人で行け」

そう吐き捨てて、銀時を引き剥がし教室を出た。

何でだろ……。

銀時と居たら調子狂うな。晋助もだけど。

二人が急に变な事、言い出してからだよ！

きつとそのせいだ。そうしよう。

……にしても。左手に違和感が。

『早くしねーと、パン無くなるぞ』

横を見ると銀時。手を見ると……。

「何してんのオオオオオオオ！？」

『ぐべはあー！』

自分でもホレボレするくらいの良いフックが、銀時の鳩尾にヒットした。

私が自分の世界に入ってるのを良い事に、さりげなく恋人繋ぎしてたし。

周りに付き合ってると思われるでしょーがアアアアアア！

『いててて……。んだよ。減るモンじゃねーんだから良いじゃねー

か
『

「勘違いされるでしょ！」

『……好きな奴でも居るのか？』

私の言葉に、銀時が険しい表情を浮かべた。

正直、いつもの銀時と違う表情にドキツとした。

・

「そ……そんな人、居ないし」

『なら良いじゃねーか。行くぞ!』

二カッと子供っぽい笑顔を浮かべると、私の手を掴み走り出した。

購買部に付く頃には、汗だくになっていた。
しかも、すでに人だかりが出来ている。
これじゃあ買えないよ!

『お前、何食う?』

銀時の言葉に、呆氣にとられた。

「え……あつと……コロッケパン」

しばらく間を置いて答えた後、銀時は短く『判った』と言って人ごみに入っていた。

私は、巻き込まれないように端っこの方に移動した。

『怜! ほらよ』

「わっ!」

ポフツと、手のひらにコロッケパンが乗った。
わざわざ、買ってきてくれたんだ。

チラツと銀時の手を見ると、ごっしやりと菓子パンが袋に入っていた。

「……甘党」

『あ？何だつて？』

「何も」

もし、あんな事を言われなければ普通に居られたのに。
まあ良いか。

「何飲む？奢ってあげるよ」

『あたりめーだ。イチゴ牛乳』

聞くまでもなかった。

こいつは、いつもイチゴ牛乳。

お金を入れて、ボタンを押すとイチゴ牛乳が落ちてきた。
それを手渡し、自分の分も買って教室に戻った。

・
教室に入って、真っ直ぐ神楽ちゃん達の席に向かった。

「お待たせー」

『早かったアルナ』

神楽ちゃんに、さっきの事を簡単に話した。

神楽ちゃんは『良かったアルナ』と笑い返してくれた。

……それにしても、さっきから気になってたけど。

「近藤先生……懲りないね」

床には近藤先生が転がっていた。

生徒に変態行為するなんて、教師失格だわ。

とりあえず、近藤先生は無視してコロッケパンを口に含んだ。

やっぱり購入のパンは美味しいわア。

『一口もーらい』

幸せに浸っている私の横から手が伸びてきて、コロッケパンが銀時の口に入った。

「あー！！ちょっと、銀時のも寄越しなさいよー！」

私も負けじと、銀時の食べかけのジャムパンを口に入れた。
あ。ジャムパンも美味しい。

『何だか、恋人みたいね』

お妙の言葉に、ハッと我に返った。

『そお？じゃあ、このまま付き合っちゃおうかア？』

「何を言い出すの！？ノリで言う事じゃないでしょーが！」

恥ずかしくて、コロツケパンを一気に頬張る。

フツと、前に言われた事を思い出した。

あれは、本気だったのかな……？

『別にノリじゃねーし。俺は本気だ』

心を見透かしたような気分になった。

真剣な顔で私を見るもんだから、目を反らさずにはいられない。

『旦那ア。大胆告白ですかイ』

『沖田さん。本編の設定持って来ないで下さいよ』

沖田くんが新八くんにツッコまれた。

そうだよ。本編の設定持ってきたらダメだよ。

『いやー。前コイツに……むぐっ！』

私は、すかさずジャムパンを奪って口に押し込んだ。
危ない危ない。

余計な事言われたら、たまったもんじゃない。

『何かあつたんですかい？』

「何でもない何でもない」

沖田くんは納得してないみたいだったけど、それ以上は聞いてこなかった。

・

しばらく、みんなで話していると携帯が鳴った。
曲はHung up。

開いてみると、晋助からのメールだった。

「……屋上に行つて来る」

みんなにそう言つて、立ち上がったら銀時に腕を掴まれた。

『高杉か?』

おっ。さすがだね。

いや。普通は判るよね。

何、感心してるんだろ。

「そつだよ。屋上来いつて。行つて来るわア」

……離してくれない。

振り解こうとしてもダメ。

「あのー……手、離してくれない?」

『……』

渋々、手を離してくれた。

「ごめんね。すぐ戻ってくる!」

慌てて屋上に向かった。

遅くなるとうるさいんだもん。

それにしても、何か用かな？

あれこれ考えていると、屋上に着いた。

・

ドアを開けても、晋助の姿はない。

キヨロキヨロと辺りを見回していると、上から声が聞こえた。

「そんな所に居たの？」

ドアの横にあるハシゴを上って、晋助の横に座った。

『遅エ』

「しょうがないじゃん。で？どうしたの？」

『別に』

短く答えられると、会話が続かない。
っていうか、用が無いのに呼んだの！？

…うう。沈黙が辛い。

体勢を変えていると、晋助が口を開いた。

『クククツ…てめーも横になれば良いだろ？』

隣を見れば、笑いを堪えていたのかニヒルな笑みを浮かべる晋助が目に入った。

それが、無性に腹立たしい。

「嫌だよ。コンクリ痛いもん」

『あ？仕方ねエなア』

そう言いながら、晋助は腕を差し出してきた。

私に、腕枕で寝れと！？

一人で戸惑っていると、晋助が痺れを切らしたのか舌打ちをして私の腕を引っ張った。

油断していた私の体は、力を入れる間もなく晋助の腕の中に収められた。

・
気を紛らわそうと、空を見上げると透き通るような蒼が目に入った。
今まで、こういう風に寝転がって空を見た事は無かったんじゃない
かな。

『たまには、こういうのも良いんじゃないか？』

「そうだねエ」

相槌を打ちながら横を見ると、晋助の顔が凄く近くて焦った。

いつから見てたんだろ…。全く気が付かなかった。

顔を反らそうにも、目力があり過ぎて目を離せない。

『ククツ…俺の顔に何か付いてるのか？』

「べ…別に何も付いてないけど」

恥ずかしくなって、勢い良く起き上がった。

どんどん顔に熱が広がっていくのが判る。

そんな顔を見せたくなくて、ポケットから携帯を出して開くと、銀
時からメールが来ていた。

『まだ』という、短い文章。

銀時らしいというか、何というか。

顔の熱が引いたのを確認して、晋助の方を向いた。

「そろそろ戻るね。みんな待ってるし」

『あア』

晋助は、目を閉じたまま短く返事をした。

授業はサボるみたい。

晋助の邪魔にならないように、そっと屋上のドアを閉めた。

・
『何してたんだよ』

後ろから聞こえた声に驚いて、危うく階段を踏み外す所だった。
冷や汗をかいたまま振り向くと、腕組みをして顔をしかめている銀
時が居た。

「特に…何も…」

何だか後ろめたくて、顔を銀時から反らした。
何もしてないし…そんな気持ちになる理由なんてないのに。

『ふーん』

素っ気無い言葉の後に、こっちに向かって来る気配がした。
その気配を感じながら、逃げるように階段を下りようとしたのに。
後ろから抱き締められて、またしても足を踏み外しそうになる。

「何す…」

文句の一つでも言っただろうと、後ろを振り返ると予想外に顔が近
くて驚いた。

銀時はニヤリと妖しい笑みを浮かべ、更に顔を近づけてくる。

昼休みの終わりを告げるチャイムが鳴り響く。
あと五分もすれば、始業のチャイムが鳴る。

「ほら…授業始まるよ」

『サボる』

鼻先をくっつけたまま、呟いた。

私は授業に出たいんだけど…。

そんな気持ちを知ってか知らずか、私の手を引っ張って階段を駆け下りる。

・

辿り着いた先は、空き教室だった。

銀時は私を教室に押し込んだ後、自分も続いて中に入った。

「何するのさ！私は、サボらないからね！」

『行けるもんならな』

ニヤニヤと笑いながら、ドアの前から動こうとしない。
ハメられた…。

だけど、幸いなことに教室にはドアが二つある。

つまりは、もう片方のドアから出れば良いだけの話し。

私は、ニヤリを怪しい笑みを浮かべた。

そんな私の思惑に気付いたのか、銀時の顔から笑みが消える。

「出口は一つじゃない！」

私は駆け出して、前のドアを目指した。

けど、それはすぐに妨げられた。

『今から行ってもムダだよ』

銀時に押さえ込まれて、身動きが取れない。

サボりに私を巻き込むなよ。

二人で「行く」「行かせない」と押し問答していると、チャイムが
鳴ってしまった。

次は、土方先生の授業じゃん！

鬼教師と呼ばれる土方先生の授業をサボるなんて…。
一気に脱力して、床にへたりこんだ。

「あーあ…土方先生の授業…」

『そんなにアイツの授業に出たかったのかよ』

銀時は何を勘違いしたのか、吐き捨てるように言い放った。

「はあ…サボったら後で何言われるか、判らないでしょ？ただそれだけ。それだけで怒るなバカ」

深い溜め息を吐いて、銀時から目を反らした。

土方先生の授業だから、私が出たといって言ってると思ったんだろう。

『…ヤキモチだよ』

「…へ？」

銀時の言葉に拍子抜けして、間抜けな顔で見上げた。
真面目な顔して言ってるもんだから、こっちが恥ずかしくなってくる。

『ぶっ！だははははは！なんっつー顔してんだよ』

「う…うるさい！あんたが変な事言うからでしょ！」

『…っていうかア。いつまで床に座ってんの？』

そうだよね。何やってんだろ。

ゆっくりと立ち上がって、ホコリを払った。

さて…これからどうしよう。

壁に寄り掛かって、腕組みしながら考えていると銀時が近寄ってき

た。

黙って見ると、妖艶な笑みを浮かべて両手を壁に伸ばすもんだから、私は腕の中にすっぽりと収まる形になった。

「どうしたの？」

大体、予想はついてるけど敢えて聞いてみた。
いつもなら、殴ってるところだけど。

『どうしたのって？判ってるクセに』

どんどん銀時の顔が近付いてくる。

ああ…やっぱりか。

そんな事を思いつつ、握り拳を作って殴る準備をしていたのに、顔が反れて肩に置かれた。

予想外の事に驚きと恥ずかしさが込み上げてきた。

『キスされるかと思っただ？』

耳元で言われるもんだから、くすぐったさと凶星な事もあって何も言えなかった。

きつと今の私の顔は、茹蛸のように真っ赤だろう。

銀時は顔を肩に埋めたまま、手を壁から私の腰に回してきた。そのまま抱き締められる形になって、身動きが取れない。

甘い匂いとフワフワの髪が鼻をくすぐる。

いつも甘いものばかり食べてるクセに、引き締まった体が恨めしい。

気付けば、銀時の背中に手を回していた。

頭では離れたいと思ってるのに、体が言う事を聞かない。

自分の中で葛藤していると、銀時の体が少しだけ離れた。それと同時に、唇に温かくて柔らかい感触があった。

それが何なのか、理解するのに時間が掛かった。

『好きなんだよコノヤロー。…だから俺…どうふえ!!』

つい、条件反射で殴り飛ばしてしまった。

いや。これで良いんだよ。

告白されても、答えなんて出せない。

…前もこんな感じだったなア。

・

「ねエ、銀時。あの時の事…覚えてる？」

『あア？何だよ急に』

銀時は殴られた頬を押さえながら、立ち上がった。
心なしか、怒ってるように見える。

「ファーストキス…先輩に奪われて、晋助と二人で仕返しに行ってくれたよね」

『お前が泣いてたからな』

そうそう。

確か…中学生の頃だったな。

それで、高校に入って銀時と晋助に告白されて…。
未だに返事が出来ない。

この関係が壊れそうで…怖い。

『おい。怜ちゃん。銀さんの話、聞いてる？』

「はっ！な…何？」

自分の世界に入ってて、聞いてなかった。

銀時は深い溜め息を吐いて、頭をガシガシと掻いている。

『だーかーらア。さっき、抱き締め返してきたでしょ？だから、俺

の事好きなのかなーって』

いつの間に、話変わってたの？

それに、あれは自分の意思じゃなくて…。

…自分の意思？

どうなんだろう…自分の事なのに、頭がついていかない。

「…判んない。まだ良く判んない」

咄嗟に出た言葉がコレって…ズルくない？

でも何だか、心の中がグチャグチャで…ちゃんとした言葉が出てこないのも事実。

・

『じゃあ、俺を好きになる可能性はある訳だ』

いつもの緩い笑顔を浮かべた。

私にしたら、その笑顔が何とも辛い。

そうこうしている内に、終業を知らせるチャイムが鳴った。

『終わったか…じゃあ、戻りますか』

当たり前のように手を繋いできて…何故か振り解く事が出来ない。

そのまま教室に入ると、黒板が目についた。

書いてあるのは、学祭の催し物について。

『二人で何してたアルカ！？』

神楽ちゃんが駆け寄ってきたから、黒板から神楽ちゃんに視線を移した。

「サボらされた。無理矢理」

最後の方を特に強調して、言ってやった。

銀時は、バツの悪そうな顔をしていたけど知らない。

『銀ちゃん…不潔よ！淫よ！インモラルよ！！』

『だーっ！！うるせえなア。っつーか、アレ何だよ』

騒ぐ神楽ちゃんを制し、黒板を指さした。
私も気になった。学祭の催し物…アレ何？
…大体の予想はつくけど。

『あー。あれアルか。どっかのサドが出した案アル』

やっぱり……。誰も、案を出さなかったんだろう。

よくあの土方先生が、コレに決めたな。

神楽ちゃんの言葉を聞いた銀時は、真っ直ぐ沖田くんの方に向かった。

『総一郎くん』

『旦那……。総悟でさア。どーしたんですかい？』

学祭の催し物について、文句を言うのだろう。
そう思つて、二人を見ていた。

銀時は真剣な顔で、沖田くんの手を掴んだ。

『よくやつてくれた！総一郎くん、君は素晴らしい！』

銀時の言葉に、沖田くん以外の全員がズッコケた。

『総一郎じゃないですぜイ。喜んでもらえて、嬉しいでさア』

二人でニヤツと怪しい笑みを浮かべて、私を見てきた。
何！？私だけじゃないでしょ！？みんなでやるんだよ！！

もつと他にあつた筈なのに……。
思い通りにはさせない！！

『おーい。HR始めっぞー』

土方先生が入つて来て、みんなそれぞれの席に着く。
不満を胸にしたまま、座ると土方先生と目が合った。
何故か頬を赤らめ、目を反らされた。

土方先生は、咳払いをしてプリントに目を向けた。

『えー…学祭の催し物なんだが、メイド喫茶に決まった…』

沖田くんの思惑通りになんてさせるか！！
先生の言葉に、私はすかさず手をあげた。

『どーした。片瀬』

「あの…普通のメイド喫茶じゃつまらないので、こんなのはどうですか？」

私は、男子がメイドをやって女子が執事をするという案を出した。
案の定、男子（特に、沖田ちゃんと銀時）からブーイングされたけど、
女子の威圧的な視線に押し黙った。

『面白そうじゃない。それで行きましょう』

このクラスの支配者であるお妙ちゃん言葉は絶対だ。
誰も逆らわない。

『…じゃあ、片瀬の案を採用だな』

心なしか、土方先生が残念そうにしているのは気のせいだろう。
晴れて私は、メイド服を着ずに済んだ。
あんな恥ずかしい服なんて、着てられないし。

『催し物が決まった所で早速、明日から準備を始める。詳細は朝話すからな』

新八くんが号令をかけて、各々帰り支度を始めた。
私も返ろつと、カバンを持ち上げた時…。

『片瀬。今日の日直、お前だろ？日誌持ってこいよ』

それだけを言い残し、先生は教室を出て行つた。
日直なんて忘れてたんですけどオオオオオ！！

「銀時！先に帰ってて良いよ！ちょっと時間かかる」

『ん？ああ…判った』

教室を出て行く銀時を見送ってから、日誌を開いた。

…見事に真っ白。

必死に授業の内容を思い出して、文字を書き込んでいく。
気付けば、教室には私一人しか居ない。

妙な静けさに襲われて、急いで黒板を消し教室を出た。

誰の声も聞こえない静かな廊下。
自然と歩くスピードが速くなる。

明日から学祭の準備のために、部活はない。
だから、余計に静けさが強調される。

やっと職員室が見えてきて、私は飛び込むように中に入った。
けれども、いつもは賑わっているはずの職員室には誰も居なくて、
寂しさが一層、私を追い込む。

『来たか』

不意に後ろから声が聞こえて、心臓がビクツと跳ねた。
声の主が居るであろう方向に振り向くと、啞え煙草の鬼…じゃなかった。

土方先生が立っていた。

「あの…他の先生達は？」

まだ明るいのに、帰るはずはないと思うけど…。

私の質問に、先生は頭を押さえて溜め息を吐いた。

・

『この先生方は、やる気ねえからな。部活も無いし、先に帰った』

「そう…なんですか」

と、いう事は。

土方先生は、私のために残ってたんだ。
何だか申し訳ないな…。

『んな顔すんなっつーの』

落ち込む私の頭を、ポンポンと叩いた。
鬼教師らしくないんですが…。

「でも…早く帰れるのに…。その分、彼女とかと会えるじゃないですか」

私の言葉に、先生は顔を顰めた。
何かマズイ事言ったかな…。

先生は、さっきよりも深い溜め息を吐いた。

『彼女なんていねーよ。仕事が忙しいのに』

「すみません…」

『何で謝るんだ?』

「いや…余計な事言っちゃったから…」

『バカか』と呟くと、優しく頭を撫でた。
大きな包容力のある手は、凄く暖かい。

さつきまでの不安が、どこかに吹き飛んでいった。

みんなから恐れられる土方先生が優しいなんて…地震でもくるんじゃないか？

そんな失礼な事を考えながら、日誌を先生に渡した。

「じゃあ、失礼します」

先生に頭を下げて職員室を出ようとした時、『待て』と呼び止められた。

その言葉に体がすくんで、全部の内臓が口から出るんじゃないかと思う位、何かがこみ上げてきた。

『俺も帰るから送ってく』

「え？あ…」

私の返事を聞かぬまま、帰り支度を始めた。
車に乗っても会話がないんじゃないのかな…。

…案の定、会話はない。

あるとすれば、家までの道順を聞かれただけ。

そして今は煙草を買いにコンビニに行ったため、車には私一人。
よく見ると、車の中はキッチンとしていて先生らしさが窺える。

何か女ネタがないかなーと、探そうとしたら戻ってきた。

『何しようとした？』

「いやー…女ネタがないかと」

『ねえよ』

そう言って、笑いながら私の頭を小突いてきた。

「いやー、元カノとかのあるんじゃないですかー？」

『そんなのは、別れたらすぐ捨てる』

意外とアツサリしてるんだ！。

まあ、ダラダラと未練つたらしい男も嫌だけど。

『…諦めよーとしても、無理な奴は居るけどな』

「え？そんな人居るんですか？」

『ああ。報われねえがな』

そう呟く先生の横顔は、憂いを帯びていた。

何だか、胸がギュウツと締め付けられる。

気まずい空気を振り払うために、他愛もない話を始めた。

好きなものとか、趣味、休みの日の過ごし方とか聞いてたら、本当の先生の姿が見えてきて、鬼教師というイメージは払拭された。

『着いたぞ。ここだろ？』

「へ？ああ！ここです。ありがとうございます」

話しに夢中で、気付かなかった…。

先生にお礼を言って降りようとした時、声をかけられた。

『俺は、お前のメイド服姿見たかったけどな』

先生らしくない言葉に、赤面してしまった。

顔を見られないように、足早にマンションに入ってエレベーターに乗った。

一向に、顔の熱が引いてくれない。

まさか、土方先生の口からあんな言葉が出てくるなんて…。

顔を両手で覆いながら、自分の部屋に向かうと玄関前に人影が見えた。

「…銀時！」

人影の正体は、私服姿の銀時だった。
しかも、寝てるし…。

「こらっ。こんな所で寝るな！」

ユサユサと揺らすと、小さく唸って目を開けた。

『…おはよ』

「おはよ。…じゃない！寝るなら、自分の部屋で寝なさいよ！」

私の言葉に、銀時は寝惚け眼で立ち上がった。
そのまま、私が鍵を開けるのを見ている。

「…何？」

『寝る。お前の部屋で』

「はあああ!？」

私の制止も聞かずに、勝手に部屋に入り込んできた。

・

フラフラとリビングに行くと、ソファの上に倒れこんだ。

「何なのよ。いつもは、こんなじゃないのに」

ブツブツと文句を言いながら、寝室に毛布を取りに向かう。
フツと時計を見ると、六時を回っていた。

「もうこんな時間……ご飯作らないと」

静かに毛布を掛けて、オープンキッチンに向かった。

ここからなら、リビングが丸見えでテレビを見ながら作れる。
まあ、今は点けてないけど。

いそいそと、カレーの準備をしていると後ろに気配を感じた。
振り向かずとも判る。

「起こしちゃった？ごめんね」

『いや。大丈夫』

あれ？何しに来たの？

やりずらいんだけどオオオオオ！！

横で見られてるのキツイ。

プルプルと震える手で、鍋にルーと落とし混ぜていく。
隠し味に、ミルクとソースを入れて完成。

…ご飯は、レトルトだけだね。
仕方ないよ。帰りが遅かったからさ。

・

ダイニングテーブルなんて、洒落たものがないから下で食べる事になる。

カレーが入った皿をテーブルに置いて、向かい合わせで座った。

「食べよ食べよ」

『おー。いただきますー』

テレビを見ながら、黙々とカレーを食べる。

…何か、耐えられないんですけど。

「…美味しくない？」

『ウマイよ』

「私、何か…した？」

いつもならベラベラ喋るのに、今日に限って口数が少ない。
どうしたって言うんだろ？
何もしてない…と思うけど。

『…告られた』

ん？何？

今、何て言った？

理解出来ずに、きょんとしていると銀時に溜め息を吐かれた。

『帰り… 1年に告られたんだよ』

あー… 告られたんだア。

顔だけなら、モテそうだもんね。

だから、口数少なかったんだア。

•
「だけど…何で？」

「告られただけで、こんな風になるなんて…。」

「嬉しくないのかな？」

「良かったじゃん！付き合っただけでしょ？」

私の言葉に、銀時は顔を顰めた。

『断ったよ。知らねー奴に告られても無理だしよ』

「ふーん。そうなんだア」

ホッとしたような、しないような…。

「いつかは、みんな離れていくんだけどさ。」

「今はまだ、このままで居たいって言うのは、私のワガママかな。」

『「ふーん」って…。随分、反応が薄いな』

テーブルに頬杖をつき、テレビを見ながら言われた。

「反応薄いつて…。他にどう反応すれば良いのさ。」

「昔っから読めない奴だったけど、今は更に拍車がかかっている。」

「悪かったね。私は、こういう人間だから」

『……………』

うわー。

今、凄く可愛くなかったよね！？

…こんなんだから、彼氏とか…親にも愛想つかされるんだ。

何だか気まずい空気になって、逃げるように食器を持ってキッチンに向かった。

銀時は変わらずテレビを見ている。

そのテレビには、銀時の大好きな結野アナが映っていた。

・
部屋には、テレビと水の流れる音だけが響く。
時間がいつもより長く感じた。

気付けば、もう洗う物がない。

仕方なく、手を拭いてリビングに戻ろうとした時、銀時の姿がない事に気付いた。

「帰ったのかな…」

何だか寂しい気もするけど、心の隅ではホッとしてる自分も居る。
あのまま居たら、更に溝が出来るんじゃないかと思ってたから。

……そんな事はないのに。

点けっぱなしのテレビには、人気が出て来た寺門通が映ってる。
確か、新八くんが親衛隊の隊長やってたな。
そんな事を考えながら、リモコンに手をかけた。

『わりい…もう耐えられねー』

フワッと漂う甘い匂いに、一瞬で包まれた。

「か…帰ったんじゃないの…？」

『帰らねーよ…帰りたくねーんだよ』

私を包む腕に、力が込められた。

銀時がどんな顔をしてるのか、知りたかったけど止めた。

…微かに、声が震えてたから。

テレビからは、「お前の母ちゃん何人？」という寺門通の曲が流れている。

・

何故か、私の心はいやに冷静だった。

曲が終わって、すぐに銀時は腕を離れた。

『…やべエ…』

そう銀時が呟いた瞬間、視界が反転した。

目の前には、銀時の顔…。

うん。ヤバイよね。

私だって、伊達に何人もの男と付き合ってきた訳じゃない。
こんな状況になったら、やる事は一つ。

「目エ覚ませエエエエ！！！！」

『ぐわあああ！！！』

流石に股間は可哀想だから、鳩尾目掛けて蹴り上げた。
私を襲おうなぞ、百年早い。

「理性は取り戻せましたア？」

『は…はい』

私の笑顔に、青ざめながらも頷いた。

・
多分、何もしてこないだろうとは思っただけど、念のため無理やり銀時を家に帰した。

明日も学校だし、今日一日で色々な事があつたせいもある。

お風呂に入って、吸い込まれるようにして眠りについた。

……はずだったのに。

それは、携帯の着信音によって遮られた。

重い瞼を開け、ディスプレイに目をやると銀時からの電話だった。

「はい？」

寝かけていたせいもあり、いつもより低い声で電話に出た。

『あ…悪い…寝てた？』

銀時は、電話の向こうで申し訳なさそうに聞いてきた。
そりゃあ寝てましたよ。

「うん。寝てた」

可愛げのある子なら寝てないと嘘をつくんだろっけど、私には無理。

『…そっか。いや、その…さっきはごめん』

「……さっき？……ああ…良いよ。気にしてない」

うつらうつらとしながら、答えた。

眠い。眠いんだよ。

寝かせてくれ。

その私の思いが通じたのか、銀時はホッと安堵の溜め息をもらした後、電話を切った。

その後、すぐに眠りについたのは言うまでもない。

第二話

翌日

銀時は寝ているのか、チャイムを押しても出てこない。

このままだと、自分が遅刻してしまう。

晋助に関しては…祭好きだけど、いつもの如く準備には出てこないだろうと思い誘わなかった。

エレベーターを降りてマンションを出ると、見慣れた車が目の前にあった。

「……土方先生？」

『おう。来たか。乗れ』

土方先生は煙を吐き出しながら、助手席を指差した。

いや…乗れって…。

「先生…マズインじゃないですか？生徒と登校なんて」

『気にしねえよ。やましい事がある訳じゃねえんだからよオ』

確かに。

しかし…何でココに？

そんな疑問を抱えつつも、助手席に乗り込んだ。

ふんわりと漂う煙草の匂い。

土方先生は私が乗り込んだのを確認して、車を走らせた。

・

『片瀬…』

「はい？」

沈黙が漂っていた車内。

その沈黙を破ったのは、土方先生だった。

『……学祭…成功させような』

「もちろんですよ！他のクラスにはない、奇抜な催し物ですから！」

フツと、啜え煙草のまま土方先生が微笑んだ。

けど、土方先生が言いたかったのはそんな事じゃないと何故か思った。

聞いたらダメなような気がして、敢えて聞かずに返事を返した。

そんな事を考えていると、あっという間に学校に着いた。

何とも便利な乗り物なんだろう。

車から降りてお礼を言った後、教室に向かった。

「おはよー」

ガヤガヤと賑わっている教室に入り、自分の席に着く。

『怜！お早うアル！』

軽快な足取りで、こちらに向かってきた神楽ちゃん。

今日も愛らしい。

「おはよ
」

抱き締めたい衝動を抑え、平静を装い挨拶を返す。

今日から一ヶ月間、学祭準備のため授業が無い。

みんなが浮き足立つ気持ちも判る。

かくいう私も、その一人だったりする。

勉強は好きじゃない。

だから、こういう準備期間とか行事の時は生き生きしてると思う。

ガラガラ

土『うるせーぞ。席に着け』

まだ、チャイムも鳴ってないのに土方先生が入って来た。

皆が席に着いたのを確認して、口を開いた。

土『今日から一ヶ月間、学祭の準備期間に入る。男子は、大道具の製作。女子は、衣装の選定とメニュー決めだ。以上。女子は、俺について来い』

私達は男子を教室に残し、土方先生の後に続いた。

着いた場所は、被服室。

中には、色々な雑誌が無造作に置かれていた。

土『この中から、男子と女子の衣装を一つ選んで決めてくれ』

その言葉に、私達は一斉に雑誌を手を取った。

メイド服とか、そういう関係の服の雑誌なのか、普通の服は全く無い。

妙『これ可愛いわねえ』

神『これも良いアル!!』

色んな雑誌を見比べる。

可愛いのが多いけど…これを男子が着ると考えたら…

何かキモイ。

でも、私がメイド服を着るのを防ぐため。

しょうがない。

こうして、衣装選びに一時間以上はかかっただろうか。

ようやく、着る衣装が決まった。

妙『男子が着るんだから、黒と白のシンプルなコレが良いわね』

神『さすが姉御！！私もコレで良いアル』

怜『私も良いよ』

他の女子も頷いている。

男子の衣装は、黒と白の派手なレースがついていないエプロン付きの衣装で決まり。

女子の衣装は、男子と色合いを合わせて、黒のベストとズボンに白のワイシャツの衣装で決まり。

その事を、教室に居る土方先生に言いに行く。

皆ついて来るのかなあと思いきや、雑誌に夢中で必然的に私一人で行く事になった。

・

他のクラスは何をやるんだろうか。

覗きたい気持ちを押し殺し、足早に教室に向かう。

ガラガラッ

ドアを開けるや否や、ダンボールが飛んできた。

咄嗟に身を屈めたお陰で、当たる事もなくダンボールは床に落ちた。

きつと私の顔は引き攣ってるんだろう。

皆の表情が強張っている。

土『お…おう。片瀬、決まったのか？』

怜『はい。決まりました』

土『わ…判った。今、行く。おい！おめーら！ちゃんとやってろよ
！！！！』

土方先生の言葉に、皆がちゃかちゃかと道具作りを始めた。

・
教室から出て、被服室に向かう距離が遠く感じる。

それはきつと……いや。絶対、会話が無いからだ。

今朝から、ずっと気持ちが晴れない。

正確には、昨日からなんだけど。

色々な事が一気にあって、頭の中がグチャグチャだ。

土『メニューの事は大体、頭にあるのか？』

怜「え！？あ……はい。大体は」

いきなり話を振られたせいで、体が大きく揺れた。

土方先生は、そんな私を見て笑いを噛み殺している。

怜「……何が面白いんですか？」

眉間にシワを寄せて、土方先生を見るとソップを向いて一つ咳払いをした。

土『と……とりあえず、衣装が決まったなら一度、教室に戻って男子の手伝いをしてもらうからな』

怜「そうですね。あの様子じゃ、何が出来るんだか判ったもんじやないですからね」

そうこうしている内に被服室に着いて、決まった衣装を土方先生に見てもらい、OKが出たので皆で教室に向かった。

その後、教室に戻った私達は無計画な男子の代わりに設計図を書き材料集めに走った。

何かに集中すると、人間は時間の感覚がなくなる。

気付けば、終業のチャイムが鳴っていた。

土『もう、こんな時間か。おい。てめーら、続きは明日やるぞ』

土方先生の言葉に、皆が手を止めた。

そうだよね。

今から焦ってやらなくても、まだ時間はあるし、大して作るものもないし。

主要なのは、メニューだもんね。

新八くんが号令をかけ、各々帰り支度を始めた。

銀『怜、一緒に帰ろうぜ』

怜「あー…うん。ちょっと待ってて」

鞆の中に、筆記用具とノートを入れて教室を出た。

ちょうど、その時

？『先輩！バンドに出てくれるんッスか！？』

？『良かったでござる。ちょうど、ボーカルを探していたところでござる』

晋『てめーらが、しつこいからだよ。言っとくが、今回だけだからな』

聞きなれた声が見ると、万斉さんと新入生のまた子ちゃんに混じって晋助の姿があった。

学祭でバンドやるんだ…。

銀『早く行くぞ』

怜「あ…」

銀時は私の手を掴むと、足早に玄関に向かった。

・
怜「ちょ…銀時！痛いってばっ」

玄関に着いて手を離れた時には、握られていた部分は赤くなっていた。

銀『……』

銀時は何も言わず、下駄箱から靴を出す。

怜「どうしたの？急に…」

銀『…高杉の事、見てただろ』

私が言い終わらない内に、銀時が言葉を口にする。

その言葉に、私は意表をつかれた。

怜「見てたって…学校に居る事が珍しかったし、何より学祭でバンドやるって」

ダンッ！！

怜「っ！？」

銀時が勢い良く片手で下駄箱に手をつく。

……まるで、威嚇でもしているかのように。

銀「お前が……どんな理由であれ、他の男を見てるのが嫌なんだっ！」

怜「何それ……私が誰を見てようが良いじゃない」

売り言葉に買い言葉。

銀時の気持ちは知ってるのに、ついつい喧嘩腰になってしまっ

・
銀『……チッ』

小さく舌打ちをした後、乱暴に上履きを下駄箱に入れて歩き出した。

怜「あ……ちょっと、待って……」

銀『来るなっ!!』

怜「っ!!」

後を追おうとする私を、銀時は怒鳴るように制止した。

前を向いたまま、銀時が続ける。

銀『……暫く、一人にしてくれ』

それだけ言うと、一度も振り向く事無く学校を出て行った。

迷った。

後を追っても、何を言えば良いか判らない。

けれど、このまま追わなければ溝が深まるばかり。

？『よオ』

やきもきしている私の背後で、声がした。

怜「晋助…」

後ろを振り返ると、薄ら笑いを浮かべた晋助が立っていた。

晋「銀時と喧嘩かア？」

怜「……うん」

俯く私に、晋助が意外な言葉を投げかけてきた。

晋「追いたいなら、追えば良いだろ？」

怜「……！！」

晋助の言葉を聞いて、私は……

・銀時を追いかける↓P39へ

・銀時を追いかけない↓P

別ルート1

私は、銀時を追いかける事を選んだ。

…と、言うよりも、体が勝手に動いていた。

追いかけても、何て言えば良いか判らない。

だけど、このまま溝が深まっていくのも嫌だ。

事の発端は自分だし、自分で決着をつけないといけない。

怜「銀時!」

銀「……っ!? 怜…」

驚きの表情を浮かべた銀時の近くに立ち、乱れた呼吸を整える。

怜「あ…あのね…私、自分が言った事は悪いと思ってない」

銀時は、黙ったまま聞いている。

私は構わず、言葉を続けた。

怜「だけど…銀時の気持ちも考えないで…あんな言い方して、ごめんなさい」

銀時は変わらず黙ったまま、長い沈黙が続いた。

どれ位の時間が経ったんだろう。

沈黙を破ったのは、銀時だった。

銀『いや…俺の方こそ悪かった』

頭を掻きながら素っ気無く言う謝り方は、昔から何一つ変わってない。

怜「フフッ」

思わず笑いが漏れる。

銀『何、笑ってんだよ』

コツツと頭を小突いてくる。

怜「いや、銀時らしいなっと思って」

銀『お前、そのニヤけ顔どうにかしろよ』

グニツと、両頬を抓られた。

怜「いひゃいひゃい」

銀『笑った罰だ』

そう言う銀時の顔は、いつの間にか笑っていた。

別
ル
ー
ト
1
終
わ
り

↓ P
4
1
へ

別ルート2

私は、追いかけなかった。

追いかけても、何の言葉も見つからないし…また銀時を傷つけそう
で怖かった。

晋助が、俯いて動かない私の手をとって歩き出した。

怜「晋…助？」

晋『さつさと帰るぞ。俺もこの後、そろばん塾あるからな』

ぶっきらぼうな晋助の言葉。

その短い言葉の中には、優しさが詰まっていた。

ここで、晋助が一人で帰れば、私は晒し者になるからだ。

少し嬉しくなった。

校舎を出た所で、私は晋助に言った。

怜「晋助、そろばん塾行くんでしょ？じゃあ、ここでお別れだね」

そう言って手を離そうとしたが、晋助の手は強く握られたまま。

晋『送ってやる』

晋助は薄ら笑いを浮かべると、塾とは反対方向の道を歩き始めた。

何だか、いつもより緊張する。

嬉しさと恥ずかしさが入り混じる。

昔はこんな事無かったのに、いつの間にか大人になってたんだな等と考えていた時、晋助が口を開いた。

晋『…学祭でバンドやるんだ』

怜「知ってる」

晋『勿論、見に来るよなア』

怜「行くよ。絶対」

私の言葉に、晋助がクックと短く笑った。

晋『はら、着いたぜ』

余韻に浸っていた私は、晋助の声にハッと我に返った。

怜「あ…ありがとう」

塾に向かって歩き出した晋助の背中に向かってお礼を言うと、晋助が立ち止まって振り向いた。

晋『余計かもしれねえが、追わなかったこと後悔してんならメール

でもしてみるよ。まあ…俺は、ライバルは居ない方がありがてえけどな』

不敵に笑う晋助に、私の顔は紅潮していく。

恥ずかしさの余り、足早に部屋に転がり込んだ。

……メールかぁ。

そんな事を考えながら、お風呂から上がると携帯が鳴っていた。

メールの受信音。

誰からだろうと思いつつ、メールを開くと銀時からだった。

短く『ごめん』とだけ、書かれていた。

銀時らしい言葉。

私も銀時に「こっちこそ」とだけ返信して、ベットに潜り込んだ。

別ルート2 終わり

↓ P 4 1 へ

・
銀時とのわだかまりも消えて、学祭の準備も着々と進んでいく。

学祭まで、あと一週間。

私達は、手作りのメニュー表を作っていた。

そんな時、黙々と作業をする私の元に、お妙ちゃんが近寄ってきた。

妙『あらあ…怜ちゃん、器用ね』

怜「そ…そんな事ないよお！お妙ちゃんだって、カラフルで可愛いよ」

お妙ちゃんはニコツと可愛い笑顔を向けて、予想もしない言葉を口にする。

妙『そう言えば、銀魂高校に昔から伝わる伝説知ってる？』

怜「伝説？んー…聞いた事ないなあ」

妙『そうなの？じゃあ、教えてあげるわ。学祭の二日目に後夜祭つてあるでしょ？その後夜祭をね、好きな人と過ごすと良い事があるって話よ』

怜「へ…へー…」

それは…ただの偶然なんじゃないかなあ？

とは、言えるはずもなく、私はただ頷くだけだった。

•
そんな私に構わず、お妙ちゃんが続ける。

妙『で、怜ちゃんは誰と過ごすの？』

怜「は？」

誰と過ごすのって…それはつまり…

妙『好きな人、居るんでしょう？』

やっぱり、その質問がきたか…。

好きな人って言われても、この人！って決まった人は居ないし…

ましてや、好きな人自体居るか判らないし

自分の事なのに、自分が一番判ってないよね。

妙『銀さんとか、高杉くんは？仲が良いじゃない』

悶々とする私に、お妙ちゃんは二人の名前を出してきた。

銀時と…晋助…

確かに幼い頃はいつも一緒に…仲良く遊んでたけど

今は違う。

二人は変わって、私だけ変わってない。

そのせいなのか、二人に抱いてる気持ちが悪なのかわからない。

そんな事を考えていてもキリがないので、お妙ちゃんに同じ質問をしました。

妙『フフツ。私に好きな人が…』

？『勿論、それは俺ですよ！？』

どこからか、声がした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4950/>

あの太陽のように……

2011年4月27日23時19分発行